

I 2017年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2017年度大学評価結果総評】

エコ地域デザイン研究センターの取り組みについては、方向性、ビジョンの再検討をはじめ、概ね評価できる。外部資金の調達努力が、今後幅広い活動に繋がっていくのではないかと期待する。

【2017年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

2017年度は大学評価委員会より、方向性、ビジョンの再検討をはじめ、概ね評価できるとの結果を得た。そのことから、今年度は、その良好な体制を継続しさらなる発展を目指すために、各プロジェクトは今後3年間の計画をたて実行に移していくことを計画している。現在の地域プロジェクトからテーマによるプロジェクトへの再編も検討にいれ、幅広い視野での研究成果を期待している。

また、2017年度の課題であった外部資金の調達については、科学研究費への申請を行ったものの採択に至らなかった。今後も継続して努力していくことが必要と考えている。直接的に関わる外部資金ではないが、2017年度に採択された私立大学ブランディング事業「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」により、国際日本学研究所との連携による文理融合を計り、今後の研究活動の幅を広げたいと考える。

【2017年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

エコ地域デザイン研究センターでは、前年度の大学評価委員会の評価結果を受けて、既存のプロジェクトの再編も含めて、研究活動をさらに充実したものにするために不断の努力をしており、方向性、ビジョンの再検討をはじめ、概ね評価できる。外部資金の調達については、科学研究費への申請を行ったものの不採択となったが、私立大学ブランディング事業「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」に参加することによって、文理融合の研究スタイルをさらに強化させたことは評価できる。

II 自己点検・評価

1 理念・目的

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、研究所（センター）の目的を適切に設定しているか。

①研究所（センター）として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的が設定されていますか。 はい いいえ

（～400字程度まで）※理念・目的の概要を記入。

- ・本研究センターの目的は「環境の時代」を切り開く真の「都市と地域の再生」のための方法を研究することである。とくに、長い歴史のなかで豊かな環境を育みながら、近代化の中でないがしろにされてきた地域資源を再生し、21世紀の都市・地域づくりの大きな柱にすることを目指している。環境のバランスと文化的アイデンティティを失った日本の都市や地域を持続可能で個性豊かに蘇らせるために、＜エコロジー＞と＜歴史＞を結びつける独自のアプローチをとるところに大きな特徴がある。
- ・国内外の専門家とネットワークを形成し、多角的な理念と手法を探求することにより問題解決に取り組む。他の国や地域と比較しながら都市とテリトリーオ(地域)の水辺空間や自然環境を歴史的な視点を取り入れつつ深く研究し、その再生の具体的な方法を積極的に提言していく。

②理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。

（～400字程度まで）※検証を行う組織（各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

兼担研究員・客員研究員から選任した委員による運営委員会を組織している。運営委員会は原則毎月開催する。年度当初の運営委員会にて理念・目的の適切性について検証する。その後の運営委員会で各プロジェクトの進捗状況を確認し、理念・目的に沿った活動が行われるよう審議している。

1.2 大学の理念・目的及び研究所（センター）の目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

①どのように理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。

（～400字程度まで）※具体的な周知・公表方法を記入。

理念・目的を当研究センターの公式ウェブサイトに掲載している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
当研究センターの特色は、学内外の研究者と連携した研究活動が活発であるのみならず、連携対象が研究者に限らず、地域住民・行政・企業・教育機関と多岐にわたることにある。 具体的には「外濠市民塾」のように近隣他大学や三輪田学園、大日本印刷と連携して江戸城外濠の環境改善に取り組むものがある。また、「玉川府中プロジェクト」では府中市や小菅村等の地元住民・自治体と連携し、基層としての中世を手掛かりに武蔵野・多摩地域全体を見渡すプロジェクトを実施している。このようなアプローチを今後は東京周辺のみならず全国的に展開することを計画している。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

エコ地域デザイン研究センターの理念や目的は、ウェブサイト上で明確に示されている。またセンターの運営委員会などの場で、理念・目的の適切性も定期的に検証されている。センターのメンバーの論文執筆活動も活発であるが、ウェブサイトの更新が滞っており、ネット上での情報発信については改善の余地がある。今後は、更新が容易な新たなウェブサイトの構築も予定されていることから、積極的な情報発信を期待したい。
--

2 内部質保証

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。	
① 質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。	はい いいえ
【2017年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。 ・ 質保証活動は運営委員会において実施している。 ・ 運営委員会の構成員はセンター長・副センター長を含め 16名の兼任研究員・客員研究員であり、議題に応じてはオブザーバーの参加も規定上認められている。運営委員会では各委員からの報告を受け、それに応じて広く議論を行い、研究活動の質の向上に努めている。	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・ 運営委員会は、文理にわたる専門性を持つ研究者から構成されており、多角的な視点による研究活動を推進することができる。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・ 特になし	

この基準の大学評価】

エコ地域デザイン研究センターでは、センター長・副センター長を含め 16名の兼任研究員・客員研究員からなる運営委員会において、各委員からの報告を受け、それに応じて広く議論を行うかたちで質保証活動が実施されている。

3 研究活動

【2018年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

3.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2017年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2017年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

■日野プロジェクト

・450年の歴史を次代へつなぐ日野用水開削450周年記念シンポジウム～昨日と今日、そして明日へ～

[日時]平成29年10月15日（日曜日）

[会場]ひの煉瓦ホール（日野市民会館）小ホール

[主催]日野市・日野用水開削450周年記念事業推進委員会

[基調講演]土地・水・緑／暮らしのデザインーヴェネツィア・東京・そして日野ー：陣内秀信

[パネルディスカッション]日野の用水の現状と課題

[清流ポスター表彰式]

■源流プロジェクト

○黎明祭

[趣旨]山仕事のはじまる秋、安全と豊穡の恵みを願い、山に祈りを捧げます

[プログラム]2017年11月18日（土）

黎明祭 山沢の森にて歌舞奉納

餐 山水小屋にて土窯料理

宴 竹で楽器づくり

奏 竹楽団による演奏会

禊 小菅の湯で入浴

神楽 橋立八幡神社にて創作神楽「玉姫」

[主催]多摩源流小菅村黎明祭実行委員会、法政大学、東京農業大学、ゆうゆう倶楽部、きこり倶楽部、NPO こすげほか予定

[後援（予定）]小菅村、山梨県東部森林組合、多摩川源流研究所

○創作神楽「玉姫」

[場面]3幕構成 第一幕 追手、第二幕 恋道、第三幕 龍と狼

プラス終幕 池の崩壊と玉川の由来、狼の行末

[配役（舞）]玉姫（龍） 大青（狼） 姥 なつち 家来 追手村人（語り部）

[音曲]笛 太鼓 琴 竹ぼら

[企画制作]法政大学エコ地域デザイン研究センター

[主催]玉姫神楽実行委員会

はるく、ハナヲ、さんご、月姫虹ほか

小菅村の神楽保存会の皆さん

[後援]小菅村、橋立神楽保存会

■府中・多摩プロジェクト（LID+GI）

○第9回水都府中研究会歩く会

[テーマ]鎌倉から見る武蔵国府

[日時]2017年7月8日

○第10回水都府中研究会歩く会

[テーマ]東山道武蔵路から見る武蔵国府～畠山重忠所縁の地を訪ねて

[日時]2017年10月7日

■東京都心プロジェクト

○第8回外濠市民塾

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

[日時]2017年4月22日(土)

[会場]DNP プラザ 2F

[報告]外濠市民塾今年度の方向性について、外濠憲章の報告

[ワークショップ]

第1部 ワーク編

〈外濠のあそびかたを思い出す〉

〈外濠のあそびかたの過去・現在・未来〉

〈外濠の遊び方を考える〉

第2部 実践編

〈外濠のあそびかたをやってみる〉

第3部 まとめ編

〈外濠のあそびかたをまとめる〉

〈外濠のあそびかたを発表する〉

[運営協力]東京理科大学神楽坂地域デザインラボ／大日本印刷株式会社ソーシャルイノベーション研究所／新宿区立四谷図書館

○第3回外濠再生懇談会

[日時]2018年3月22日(木) 18:00-20:30

[会場]法政大学・市ヶ谷田町校舎3階 T311 教室

[議題]外濠に関する各大学および外濠市民塾等の活動

[報告]外濠に関する企業等の活動、外濠再生憲章について、外濠再生懇談会の今後の活動について

[運営サポート]一般社団法人日本プロジェクト産業協議会、一般社団法人建設コンサルタンツ協会、一般社団法人関東地域づくり協会

○外濠ヤギプロジェクトミニシンポジウム「外濠でヤギを飼おう！—生き物がつくるヒト・コト・モノの都心型循環構造」

[日時]2018年1月25日(木) 19:00-20:30

[会場]法政大学ポアソナードタワーD会議室

[主旨説明]

[講演会]

- ・佐倉弘祐 信州大学工学部建築学科助教
- ・有賀敬直 有限会社ハートビートプラン
- ・河上めぐみ 有限会社土遊野

[ディスカッション]ヤギが生み出すヒト・モノ・コトの循環とは？

[パネラー]有賀敬直、河上めぐみ、佐倉弘祐、岩佐明彦(法政大学建築学科教授)、松下純子(文京区議会議員)、本郷寛和(千代田区観光協会)、栗生はるか(文京建築会ユース代表)、柳川星(日本大学まちづくり工学研究科)、高道昌志(法政大学研究員)

■その他

○東京文化資源会議シンポジウム「東京・水の記憶と湯島社寺会堂プロジェクト」

[日時]2017年11月14日(火) 午後4時～6時

[場所]神田明神祭務所地下ホール

[プログラム]

- (1)「水の思想」プロジェクトの概要：中島隆博 東京大学教授
- (2)江戸・東京における「水」の役割：高道昌志 法政大学研究員
- (3)湯島神田社寺会堂プロジェクトの概要：宇野求 東京理科大学教授
- (4)パネルディスカッション「東京 水の記憶 —湯島神田社寺会堂の視点から—」

<パネリスト>宇野求(東京理科大学教授)、清水祥彦(神田神社権宮司)、高道昌志(法政大学研究員)、張競(明治大学教授)、中島隆博(東京大学教授)：司会

[主催]東京文化資源会議

[共催]UCTP 西原育英文化事業団助成プロジェクト

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

[後援] 神田神社

○シンポジウム「水都・江戸東京のグリーンインフラ～東京五輪に向けて江戸から何を学ぶか～」

[日時] 2017年7月11日 18:00～20:45

[場所] 法政大学市ヶ谷地ボアソナードタワー26階スカイホール

[主催] 法政大学エコ地域デザイン研究センター

趣旨説明：陣内秀信（法政大学建築学科教授）

基調講演：「水都江戸の自然と文化」：田中優子（法政大学総長）

第一部 話題提供

1. 「江戸東京のグリーンインフラと外濠・玉川上水の価値」 神谷 博（法政大学建築学科兼任講師）
2. 「ロンドンのオリンピックレガシーとグリーンインフラ」 木下 剛（千葉大園芸学部准教授）
3. 「武蔵野の生き物ネットワークとグリーンインフラ」 宮下清栄（法政大学都市環境デザイン工学科教授）

第二部 パネルディスカッション「水都・江戸東京のグリーンインフラ」～東京五輪に向けて江戸から何を学ぶか～

司会進行：岩佐明彦（法政大学建築学科教授） パネリスト：陣内秀信（法政大学建築学科教授） 石神 隆（法政大学公共政策研究科教授） 北山 恒（法政大学建築学科教授） 高見公雄（法政大学都市環境デザイン工学科教授） 木下 剛（千葉大園芸学部准教授）

○国際日本学研究所と共催で講演会を開催

エリー・デューリング（パリ西ナンテール大学、パリ国立美術大学）を囲んでの学習会

[日時] 2017年4月27日（木）18:30～20:30

[場所] ボアソナードタワー25階B会議室

[提案者] 安孫子信、北山恒、陣内秀信

○「新しい居住都市のイメージ」展

[参加メンバー] 法政大学DLU、横浜国立大学Y-GSA、東京工業大学塚本研究室

[開催場所] KAMATA_SOKO（東京都大田区）

[会期] 2018年2月18日～3月4日

[シンポジウム] 2018年2月18日/2月24日/3月4日

□法政大学DLU「江戸東京研究センター」では、東京の近未来を描く。近代以前の「江戸」の社会空間を参照し、そこに存在していた豊かな社会的共通資本を召喚することによって、現代社会に人々の関係性を再構築できないか検証する。

□横浜国立大学Y-GSA「次世代居住都市研究」では、2016年5月にフランス・ボルドーで展示した「木造密集市街地のSpace of Commoning」をベースに住宅の共同建て替えの研究を展示する。

□東京工業大学塚本研究室では、継続した東京研究の中で「続Tokyo Metabolizing」として東京の2050年の暮らしの想定を「第5世代の住宅」として展示予定

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・2017年度法政大学エコ地域デザイン研究センター活動報告書

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2017年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を簡条書きで記入。

■刊行書籍

・陣内秀信『水都ヴェネツィア—その持続的発展の歴史』法政大学出版局 2017年04月

【概要】この地を原点としてビザンツやイスラーム世界、さらには江戸東京を含む世界の都市へ視点を広げ、水都学の提唱に至る著者のヴェネツィア研究の集大成。その成り立ちと魅力を語り、交易都市から文化都市へと転換する十六世紀の生活空間、サン・マルコ広場の再構成の過程、都市の祝祭空間を論じて、水と共生してきたこの都市のサステイナブルな発展の歴史を明らかにする。

・Chanpil Park（朴 賛弼）『SEOUL CHEONG GYE CHEON STREAM RESTORATION History and urban environment challenge』Kimoondang 2017年8月20日

【概要】高速道路を撤去し、緑あふれる川を復元。世界の注目を集めたこのプロジェクトは、

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

これを起爆剤に、衰退した旧市街の活性化をはかる大胆な都市戦略だった。都市部の川辺デザインの先駆例「清溪川」の再生プロジェクトをまとめた「ソウル清溪川 再生（2011年発行 鹿島出版会）日韓同時出版」の英語版である本書。発刊にあたり、川の周辺エリアの立面図、復元後の10年を振り返るテキストを追加収録。

・陣内秀信（吉田伸之他と共編著）『東京の歴史1-通史編1』吉川弘文館 2017年10月

【概要】多様な地形をもち、豊かな自然に彩られる東京。武蔵国府の設置、武士団の成長、小田原北条氏の支配。その下で営まれる人びとの暮らしや社会の動きに視点を置き、「東京の歴史」の舞台と、先史から戦国時代の歩みを描く。

■審査論文

・Hidenobu Jinnai, “The landscape of Tokyo as a City on the Water-Past and Present” (Edited by H. Porfyriou and M. Sepe, Waterfronts Revisited: European Ports in a historic and global perspective), Routledge, London, pp. 177-188, 2017.

・馬場憲一『伝説地』の文化財保護をめぐる動向と新たな取り組みについて—『記憶の場』の保存による地域アイデンティティ形成の視点から—、法政大学現代福祉学部『現代福祉研究』第17号、pp. 45-62、2017年3月

・陣内秀信「セヌ川、テムズ川との比較の視点からみた隅田川の特質」『隅田川流域を考える—歴史と文化—』（東京都江戸東京博物館 調査報告 第32集）東京都江戸東京博物館、pp. 71-96、2017年3月

・堀尾作人・陣内秀信「産業革命前における水力産業都市・桐生の形成」『日本建築学会計画論文集』第82巻 737号、2017.7、pp. 1839-1846（査読付き）

・陣内秀信「方法としての水都」『フィールドとしての「西洋」を問う—建築史・都市史研究が拓く未来—』（日本建築学会大会研究協議会資料）日本建築学会建築歴史・意匠部門、pp. 5-14、2017年9月

・Hidenobu Jinnai, “Evolutional Steps toward the Post-Western/Non-Western Movement in Japan”, Built Heritage, No. 3 Volume1, 2017.9, pp. 44-53.

・馬場憲一「日本におけるエコミュージアムのあり方について—博物館機能論の視点から—」、日本エコミュージアム研究会『エコミュージアム研究』第22号、pp. 15-20、2018年2月

・馬場憲一「武州御嶽山の宗教的文化空間の形成とその維持—近世の社殿造営・修復とその資金調達分析を踏まえて—」、武蔵御嶽神社及び御師家所蔵古文書学術調査団 編『武州御嶽山の史的研究』岩田書院、pp. 121-163、2018年3月

・長野浩子「市民参加のまちづくりの変容に関する研究—日野市の市民活動と環境基本計画策定・推進の実態から—」『サステイナビリティ研究』第8号、法政大学サステイナビリティ研究所、2018年3月

■その他の論文

高道昌志・福井恒明・潮優香子・松浦萌「九段地区花街の成立と空間変容に関する研究」『日本建築学会 2017年度大会(中国)』、講演番号 9348、広島、2017年9月

神谷博「野川流域のグリーンインフラにおける水と緑の評価」『日本建築学会 2017年度大会(中国)』、講演番号 40279、広島、2017年9月

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して2017年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2017年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を簡条書きで記入。

・特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

（～400字程度まで）※2017年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

当センターでは、月一回の頻度で運営委員会を実施している。運営委員会の構成委員はセンター長・副センター長を含めた16名の兼任研究員・客員研究員と、議題に応じてはオブザーバーの参加も規定上認められている。そのため、運営委員会では各委員からの報告に対し、学内外を問わず、幅広い立場の方々からの意見や指摘を受ける体制が整っている。加えて、各プロジェクトでは、地元の町会や企業、行政との連携が取られているため、事業内容についてその都度評価を受ける柔軟な体制が築かれている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし
<p>⑤ 科研費等外部資金の応募・獲得状況</p>
<p>※2017年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および2017年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。</p> <p>■ 応募した外部資金</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 科学研究費基盤研究 A 「〈水都学〉における基層構造とテリトリーに関する研究」 ・ サントリー文化財団「地域文化活動の実践者と研究者によるグループ研究助成」 ・ 平成 30 年度千代田学事業「九段・神保町地区の地域史資料アーカイブ化とその表現に関する調査研究」 ・ 2018 年東京都・アーツカウンシル東京「トウキョウトウキョウフェスティバル」 <p>■ 採択を受けた外部資金</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 平成 29 年度千代田学事業「千代田区における都市の賑わい可視化と展開の処方箋」、2017 年 4 月～2018 年 3 月、643,000 円 ・ 平成 29 年度私立大学研究ブランディング事業「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」（国際日本学研究所との協働）
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・ 各プロジェクトでは、これまで蓄積してきた成果や研究者のネットワークを活かしながら、対外的に多くの活動を行っている。さらにシンポジウムや論文執筆、報告書刊行により、研究成果の社会的還元を積極的に行っている。 ・ 多くのプロジェクトに地元の住民や行政・企業が関わり、活動に対するフィードバックを受けやすい体制にある。 	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・ 国際日本学研究所との協働のもと、平成 29 年度私立大学研究ブランディング事業「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」の採択を受けることができたが、これはエコ地域デザイン研究センターを直接的に支える外部資金ではないため、独自の外部資金を獲得する必要がある。そのため科学研究費等の外部資金の申請を行う。 	

【この基準の大学評価】

<p>エコ地域デザイン研究センターの研究活動として、「東京都心プロジェクト」等、複数のプロジェクトが実施され、多くの公開シンポジウムも開催されている。研究センターのメンバーは、数多くの著作を発表し、研究成果を精力的に発信しており、高く評価できる。</p> <p>しかしながら、ウェブサイトの更新が滞りがちであることは改善すべき点であろう。トップページのイベント案内は比較的頻繁に更新されているが、それ以外のページは 2016 年度以前の記述のままの箇所が少なくない。各プロジェクトについて紹介したページにも、2017 年度の活動はまだほとんど掲載されていない。なお、新しいウェブサイト構築時に過年度も含めセンターの活動報告書を掲載する予定とのことであり、今後の対応を見守りたい。</p> <p>また、センターとしては第三者評価等は特に受けてはいないが、運営委員会においてオブザーバーからの意見聴取を行ったり、各プロジェクトでは連携先からの事業内容に関する評価を受ける体制となっている。</p> <p>千代田区の実施する千代田学事業から外部資金を獲得したことは高く評価できるが、科学研究費基盤研究 A に応募したものの不採択となったことは、センターの研究活動に少なからぬ影響を与えらると思われる。2016 年度までの活動レベルを維持するために、科研費をはじめ外部資金獲得のための一層の努力が期待される。</p>
--

4 教育研究等環境

【2018 年 5 月時点の点検・評価】

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。	
①ティーチング・アシスタント (TA)、リサーチ・アシスタント (RA)、技術スタッフなどの教育研究支援体制はどのようになっていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
(~400 字程度まで) ※教育研究支援体制の概要を記入。 当研究センターでは現状では研究活動を支援する TA や RA 確保の予算が確保できていない。兼任研究員・客員研究員の多くが教員であり、各プロジェクトには、教員の研究室・ゼミに所属する学生や、他大学の学生がボランティアで参加することで研究活動を支援している。プロジェクトが多様であることから、固定した TA や RA よりもこうしたボランティアでの支援がむしろ有効に機能している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・研究活動を支援する学生にとっても通常の研究活動では経験できない住民や高校生など多様な人々との交流が実現している。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・学生ボランティアによる研究活動支援には限界があるため、外部資金獲得によりある程度の謝金支払いが必要である。	

この基準の大学評価】

エコ地域デザイン研究センターでは予算が獲得できていないため、TA や RA を雇用できていないが、各プロジェクトのメンバーの教員が声をかけた学生たちがボランティアで研究活動を支援しており、TA や RA を雇用できていないことの悪影響を最小限に留めることができている。多くの学生たちがボランティアとして研究活動にかかわっているのは、当センターの活動が魅力的なものであることの証左でもあろうが、学生ボランティアにはやはり一定の限界があるので、外部資金を獲得することで TA や RA を雇用できるようになることを期待したい。

5 社会連携・社会貢献

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。	
①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S A B
(~400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 当研究センターは学外組織と連携したプロジェクトを多く企画しており、その連携は双方にとって研究成果や知見を発信共有する場となっている。 ・外濠市民塾プロジェクトでは、これまでの大学、地元、行政、企業の連携に加え、特に地元の高校(三輪田学園)との交流を定期的かつ積極的に行っている。 ・源流プロジェクトでは、小菅村余沢町の住民、東京農業大学の学生、本学の学生と連携し地域の伝説を元にした創作神楽を行い、地域の活性化に取り組んでいる。また、1年を通じて継続的にイベントを行い、11月にはその締めくくりとなる黎明祭を行った。 ・「玉川府中プロジェクト」は、「日野プロジェクト」や「外濠市民塾」などこれまで当研究センターが蓄積してきたノウハウを基礎に、地元住民はもとより郷土資料館や教育委員会と連携し様々な学部学科の教員の参加により、広く活動を行う計画である。	
【2017年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

新規取り組み事項：源流プロジェクト、府中プロジェクト

改善された事項等：外濠市民塾では地元の高校がプロジェクトに参加し、地域との連携がさらに密になり大きく活動の幅が広がることとなった。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2017年度法政大学エコ地域デザイン研究センター活動報告書

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・1-(2)にも対応するが、当研究センターの長所・特色は社会貢献、社会連携を前提としたプロジェクトを行っており、各プロジェクトは、これまでに構築してきたネットワークや成果を活かしながら、着実に前進を続けている。	1. (2)

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・「外濠市民塾」や「玉川府中プロジェクト」は外部の地域団体との活動を積極的に行っているが、まだ活動は始まったばかりといえる。そのため、これからさらに、社会貢献や社会連携を行い対外的な活動を行う必要があるといえる。	

この基準の大学評価】

エコ地域デザイン研究センターは、多岐にわたって学外組織と連携しており、高く評価できる。近隣の三輪田学園との連携も定期的・積極的に行われており、今後も継続を期待したい。

6 大学運営・財務

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の役職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

①所長（センター長）をはじめとする所要の職を置き、また運営委員会等の組織を設け、これらの権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。

はい いいえ

(～200字程度まで) ※概要を記入。

当研究センターには、センター長及び副センター長を置き、計16名の委員から構成される運営委員会を設置している。センター長及び運営委員会の職務・権限等については「サステナビリティ実践知研究機構規程」「サステナビリティ実践知研究機構細則」に規定されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「サステナビリティ実践知研究機構規程」「サステナビリティ実践知研究機構細則」
- ・エコ地域デザイン研究センター運営委員会議事録

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・学部の枠を超えた文理協働による運営が行われることにより、総合大学としての本学の特徴を活かした運営が行われている。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

この基準の大学評価】

エコ地域デザイン研究センターでは、センター長および副センター長が置かれており、16名の委員からなる運営委員会

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

も設置されている。権限や責任を明確にした規程等が定められており、運営上の問題はないと思われる。また学部の枠を超えた文理協働による運営がなされている点は評価できる。

III 2018 年度中期・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	玉川府中プロジェクト：古都府中の基層を探り江戸と近世府中の繋がりを探る。研究チームによる隔月の研究会を行う。
	年度目標	玉川府中プロジェクト：研究会を行い、郷土資料館や教育委員会の連携を取り、古都府中の理解を深める。
	達成指標	玉川府中プロジェクト：シンポジウムの開催や報告集の作成、歴史だけでなく自然や地形及び生態系を取り入れた絵図の作成を行う。
No	評価基準	社会貢献・社会連携
2	中期目標	外濠市民塾：シンポジウムや講演会を行うことで、認知度をさらに高め、周辺地域と連携した活動を行っていく。
	年度目標	外濠市民塾：地元住民、地元企業や地元の教育機関との連携を深め、より良い関係を築いていく。これまでの活動を総括し、社会的にアピールするためのシンポジウムを開催し、報告書を発行する。
	達成指標	外濠市民塾：周辺大学や周辺企業と協働し、シンポジウムを開催する。

【重点目標】

外濠市民塾の活動総括と社会的アピールのためのシンポジウムの開催

<目標を達成するための施策>

- ・東京理科大学、中央大学、三輪田学園、大日本印刷株式会社、株式会社 KADOKAWA、ヤフージャパン等との協働
- ・江戸東京研究センターのブランディング事業との共同作業

【2018 年度中期・年度目標の大学評価】

エコ地域デザイン研究センターの水都府中プロジェクトについては、中期目標、年度目標、達成指標ともやや抽象的な表現になっており、これまで通りの活動を継続するだけなのか、あるいは何か新規事業に取り組むのかが明確に示されていない。外濠市民塾については、おおむね適切な中期目標、年度目標が設定されている。しかし達成指標は、「周辺大学や周辺企業と協働し、シンポジウムを開催する」とされており、協働する周辺大学や周辺企業の数現在よりも増やすのか、あるいは厳選して数は減らすものの協働の質を高めることを目指すのかが明確に示されていない。シンポジウムも開催回数を減らすのか、維持するのか、増やすのか、「達成指標」をより明確にすることが望まれる。

【大学評価総評】

エコ地域デザイン研究センターは、同時にいくつものプロジェクトを遂行し、着実に研究成果をあげており、総合的に見て高く評価できる。学外組織との連携を非常に積極的に行っていることは高く評価できる。しかしながらここ数年外部資金の獲得額が少なくなっており、このことが研究活動に悪い影響を与えることが危惧される。外部資金獲得のためにさまざまな取り組みを行っていることは評価できるが、さらに一層の努力が期待される。また優れた研究成果をあげているにもかかわらず、2017 年度はウェブサイト上での情報発信が滞りがちだったことも悔やまれる。2018 年度にはウェブサイトの更新頻度を向上させ、ネット上での情報発信にも力を入れることは、外部資金獲得の上でも重要なことだと思われる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。